

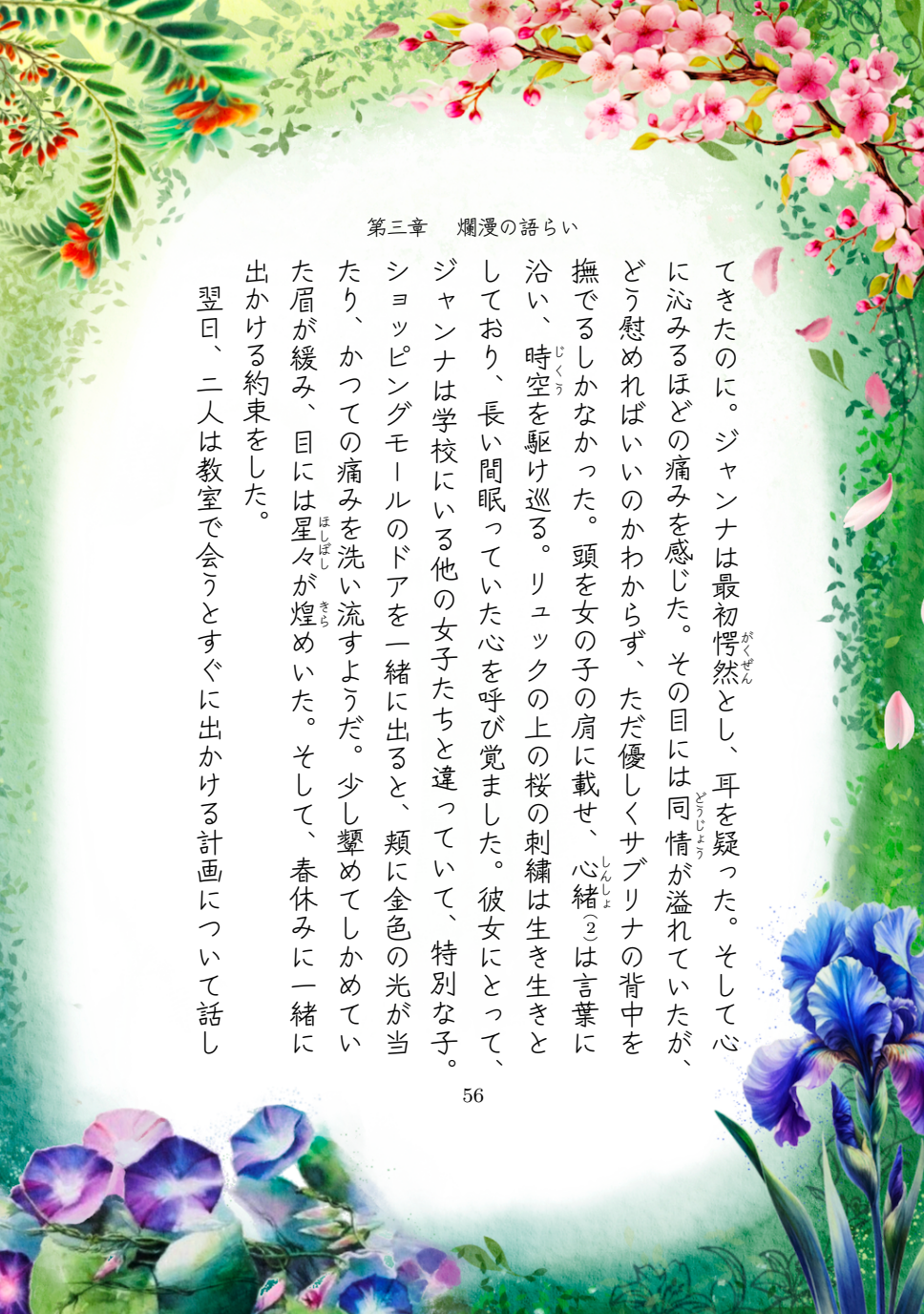
第二章

爛漫の語らい

第三章 爛漫の語らい

さらに一日が過ぎ、二人は人通りの少ない小道を歩いて、あるショッピングモールへと足を運んだ。一階にあるソファで、リュックを隣に置き、座った。周りにはほとんど人がおらず、閑静^{かんせい}だった。サブリナは深呼吸をして、自分の波瀾^{はらん}万丈^{ばんじよう}(1)な過去について語り始めた。これまでは巧みにこの話題を避け

(1) 波瀾万丈 「波瀾」の「波」は小さな波、「瀾」は大きな波。「万丈」は一丈の一万倍で、非常に高く上がっていること。つまり物事の変化が起伏に富んではげしいこと。



第三章 爛漫の語らい

てきたのに。ジャンナは最初愕然^{がくぜん}とし、耳を疑った。そして心に沁みるほどの痛みを感じた。その目には同情^{どうじょう}が溢れていたが、どう慰めればいいのかわからず、ただ優しくサブリナの背中を撫でるしかなかった。頭を女の子の肩に載せ、心緒^{しんしよ}は言葉に沿い、時空^{じくう}を駆け巡る。リュックの上の桜の刺繍は生き生きとしており、長い間眠っていた心を呼び覚ました。彼女にとって、ジャンナは学校にいる他の女子たちと違っていて、特別な子。ショッピングモールのドアと一緒に出ると、頬に金色の光が当たり、かつての痛みを洗い流すようだ。少し顰めてしかめていた眉が緩み、目には星々^{ほしほし}が煌めいた。そして、春休みに一緒に出かける約束をした。

翌日、二人は教室で会うとすぐに出かける計画について話し

第三章 爛漫の語らい

込んだ。しかし、話が盛り上がったところでブライアン先生に呼び出されたので、サブリナは話を中断せざるを得なかった。先生は彼女を倉庫に連れて行き、運動会の器具を準備させた。倉庫の床の石積みは綺麗にならされ、様々なスポーツ用具が整然と並んでいて、凄然^{せいぜん}(3)たる雰囲気^{せうき}が漂っている。部屋^{へや}の奥では、モニカが忙しく動き回り、棚から物をトラックへと運んでいた。サブリナは悠然と近づき、運動会のチーム分けのことを話した。モニカは彼女が青チームに属^{ぞく}していることを知り、「デラニーも青チームだっけ？」と聞いた。

(2) 心緒 心が動いとぐち、思いのはしほし。

(3) 凄然 寒そうな様子。

第三章 爛漫の語らい

「多分そう。二人は仲良しだよな、同じチームだったらよかったのにね」

「もう仲良くない、あいつ大嫌い！前にカフェに行こうって誘ったのにドタキャンされて、三時間も一人で待たされたの！だから嫌い」

「それで喧嘩したの？」

「まあ喧嘩はしてないけど、うちらはただ普通のクラスメートのままでいい。話を戻そう。青チームで知り合いのメンバー、あまりいないよね」

「そうなの……だから新しい友達を作るつもり」

そう言ったが、心の中で退屈することを知っていた。

下校のベルが鳴り、生徒たちは荷物をまとめて素早く家に帰

第三章 爛漫の語らい

り始めた。ジャンナは一人、駅へ向かって歩いていった。サブリナはその姿を追いかけて、走っていったので髪が乱れていた。

「今日はモールに買い物に行くから、スクールバスに乗らないの」

「私もモールに行くわ。サンダラスを買おうと思って……一緒に行くようよ」

とジャンナは答えたが、実は財布を持っていなかった。モールに着くと、二人は店内を一回りして何も買わなかった。お互いに、相手が一緒にいる時間を少しでも長くしようとしていることを暗黙のうちに理解した。この世にそんなに多くの偶然はない。人々が意図的^{いとてき}に作り出した偶然に過ぎない。店を出ると、何人かのクラスメートを見かけた。サブリナが挨拶しようとする

ると、隣の女の子がその腕を掴み、身を隠しながら耳元で囁いた。
「あの子たち、私の友達じゃないの。あまり親しくなくて……」
相手の恥ずかしそうな表情を見て、自分も二人だけの時間を
壊したくなかったので、

「じゃあ、私も付き合おうわ。実は私たちもあまり親しくな
いの」
と宥めた。^{なだ}歩きながら、ジャンナはいきなり話題を変えた。

「一緒にいるといいな、ほっとする」

「私もー」

と今度ははっきり答えた。顔が熱くなるのを感じ、反応する
間もなく、頬を染め笑顔を交わした。柔らかな春の陽光が揺れ
動いていた。二人は肩を震わせ、笑い合った。その時、光の輪

が長い睫毛まつげの隙間を通り抜け、目の下のマスクに影を落とした。

春休み前の最後の日、運動会は予定通り開催された。学生たちは次々と会場に集まり、チームごとに芝生しばふの上で奔放ほんぱうに走り回ったり、縄跳びをしたり、競技したりして、楽しんだ。サブリナとデラニーはどちらも運動が苦手だったので、控えを選び、観客席で応援することにした。他の元気いっぱいな若者たちとは異なり、デラニーは何事にも興味を示さなかった。いつも猫背で腰に手を当て「疲れて死ぬ」とぼやいていた。

サブリナは体だけ観客席に座り、魂が抜けているかのよう
に相手の質問に散漫に答えていたが、心はすでに目線によつ

(4) 奔放 世間のしきたりを無視し、思うままにふるまうこと。

第三章 爛漫の語らい

て色んなところに漂っていた。緑地りよくちの中央には、ある「シャツを着ている女子たちがいた。そのうちの一人は、髪を肩に垂らし、両側に細い三つ編みをしている。振り返ると、ジャンナだった。微風が彼女の黒髪を吹き上げ、逆光で髪の束の縁が金色のハローに輝いている。まるでロバート・ライナー監督の映画『Flipped』の主人公ジュリー。サブリーナは見惚みとれて、無意識にその方向へと歩き出した。

「君、どこへ行くんだ？」

ブライアン先生の叱りが耳に入って、夢の中で空足からあしを踏むような焦りで立ち止まった。背中を先生に向けたまま、慌てて言い訳した。

「先生、ト、トイレに行きます」

第三章 爛漫の語らい

「報告してからにして！勝手にチームを離れてはいけない！」

「はい、分かりました」

「早く戻ってきなさい。五分以内に」

「はい、分かりました」

と返事はロボットのようになんげだつた。そうは言いつつ、先生の視界から逃れると、心が向かう場へ小走りで行った。その先にいた女の子は、溪流のように清らかで澄んだ瞳で、人々の心を癒す温もりを称えている。唇の弧は三日月のように曲がっていて、白い歯を見せ、まるで天界から降臨した妖精のようだ。会ってからしばらくして、サブリナはしょんぼりと言った。

「私、ここに長くはいられないのね、戻らないと」

「どうして？」

第三章 爛漫の語らい

「先生から五分以内に戻れって命令されて……あの先生は他のチームの子とおしゃべりをするのは許してくれないみたい」

「えっ？ 厳しい人だね。じゃあ、隠れて先生に見つからないところで話せばいいでしょう？」

と言いながら、先生から見えないように少女を自分の後ろに隠した。その動きに彼女は最初不意をつかれたが、女の子の無邪気そうな表情を見て、何も言わずに一笑した。その瞬間、巢に帰る小鳥のように、ずっとゆらゆら揺らいでいた心が居場所を見つけた。騒がしい人々の中で、二人の距離はとても近く、声も小さくして、他人に聞かれないように言葉を交わした。途中、写真部のメンバーであるエイヴリーがカメラを持って歩いてきた。

第三章 爛漫の語らい

「はい、このまま動かないで、写真撮るから。3……2……1……チーズ」

カチャリと音を立て、その幸せの一時を捉えた。

「え？ サブリナ、なんでここにいるの？」

と意外そうな口調で尋ね、続けてこう言った。

「ブライアン先生が探しているよ。早くチームに戻ったほうがいいと思うよ」

少女の顔が少し乱れた。まるで上品で静かな泉にビール瓶の蓋を放り込んだみたいなの波紋が彼女の顔に広がり、そして収まった。やむなく返事をし、後ろ髪を引かれる思いをしながら戻った。運動会が終わると、生徒たちは皆、友達と一緒に会場を出た。その時、人混みの中でジャンナを探して、

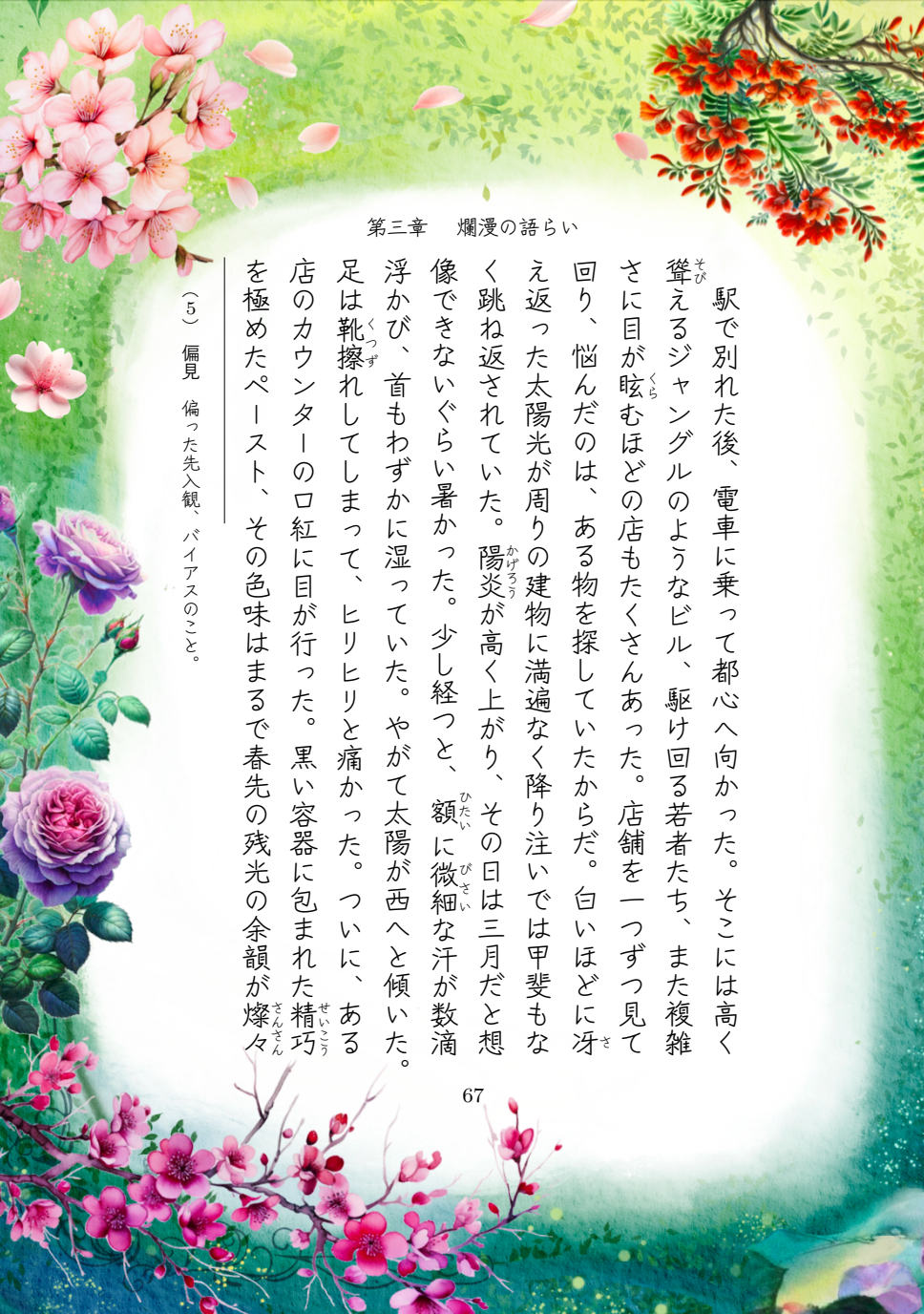
第三章 爛漫の語らい

「明日十二時、駅で待ち合わせね。もし何かあったらLINEで連絡して」

と確認するように伝えた。女の子が頷いて、返事をしようとした時、横にいたレイラが鋭い視線を投げかけ、女の子の手を連れて去った。その二人が仲良しであることを了知^{りようち}しているのも関わらず、偏見^{へんけん}は心の底に影を落とした。だが、深く考える暇はなかった。

「一緒に駅まで行こう」

デラニーの声が後ろから聞こえてきた。拒む理由がなく、同意した。それでも、歩いてる間はぼんやりして上の空だった。一方で相手は手舞足踏^{しゅぶそくどう}で自分の趣味について色々と言っていた。



第三章 爛漫の語らい

駅で別れた後、電車に乗って都心へ向かった。そこには高く聳^{そび}えるジャングルのようなビル、駆け回る若者たち、また複雑さに目が眩^{くら}むほどの店もたくさんあった。店舗を一つずつ見て回り、悩んだのは、ある物を探していたからだ。白いほどに冴え返った太陽光が周りの建物に満遍なく降り注いでは甲斐もなく跳ね返されていた。陽炎^{かげろう}が高く上がり、その日は三月だと想像できないぐらい暑かった。少し経つと、額^{ひたい}に微細^{びさい}な汗が数滴浮かび、首もわずかに湿っていた。やがて太陽が西へと傾いた。足は靴擦^{くっず}れしてしまって、ヒリヒリと痛かった。ついに、ある店のカウスターの口紅に目が行った。黒い容器に包まれた精巧^{せいこう}を極めたペースト、その色味はまるで春先の残光の余韻^{さんさん}が燦々

(5) 偏見 偏った先入観、バイアスのこと。

第三章 爛漫の語らい

と輝いていた。少女はすぐにそれを買った。店を出ると、暮れ行く景色が広がった。ビルの谷間には、煌めく星の海があった。街角のネオンは色鮮やかなライトで照らし、夜に隠れた孤独を吹き飛ばした。夜が深まるにつれ、街の灯りが一つずつ消えていき、彼女と一緒に眠りに入った。

次の日は約束した日になり、空には細雨が降っていた。少女は紫色のニットドレスを身に纏い、待ち合わせ場所に向かった。長く黄茶色の髪は大きな波を描くクセを作って胸の前に落ち、その装いは成熟した雰囲気でした。どれぐらい待っていたのかわからなくなる頃に、その子はようやく姿を現した。香染色のトレンチコートを着て、珍しく髪をお団子にしていた。

「このプレゼント、あげる！」

第三章 爛漫の語らい

と言いながら、少女は後ろに隠していた手を出した。その手は丁寧に包装されたギフトバッグを掴^{つか}んでいた。女の子は恥ずかしそうにそのプレゼントを受け取った。慎重^{しんちよう}に包装紙を解いてみると、中には口紅があった。黒いスティックにはピンクのバラと「ジャンナ」という刻印が一目瞭然だった。サプライズに呆然^{ぼうぜん}とし、驚きのあまり、口を手で覆って話がうまくできなくなった。

「どうして……どうして私の名前が？ どうやったの？」

「店に刻んでもらったの。中も開いてみて、リップの色は気に入った？」

「うん、もちろん好き！ 人生で初めてもらったの、私の名前が

(6) 香染色 丁子を煎じて染めあげた黄みに寄せた薄茶色。

第三章 爛漫の語らい

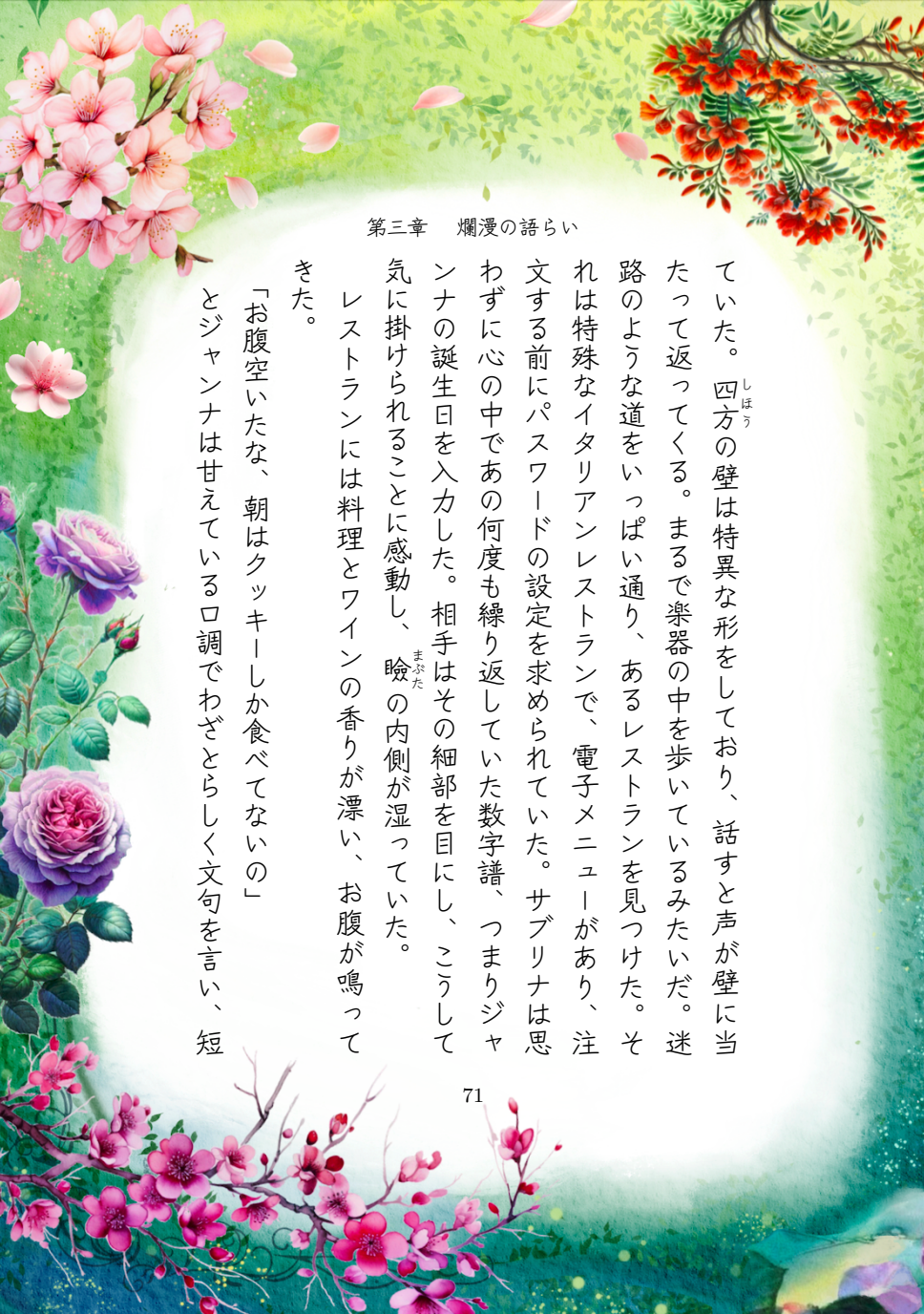
入ってる物」

「気に入ってくれてよかった」

少女は言わなかった。昨日、このプレゼントを選ぶためにデパートの全ての階を回ったことを。女の子は、目じりを下げて、喜んで笑顔を咲かせた。

その後、二人は手を組んでエスカレーターに乗り、ホームに下りた。電車が来て、その時間帯は混雑しておらず、二人は席を見つけて座った。雨粒が車窓にパタパタと落ち、二人の友情に淑やかな音楽を奏でていた。しばらくすると、電車は目的地に到着した。そこは都市で最も洒落ている場所。雨のせいか、通りにはほとんど人がおらず、寂寥せきりょうとしていた。

特徴のある建物に入ると、人影はなく、中はとても広々ひろびろとし



第三章 爛漫の語らい

ていた。四方の壁は特異な形をしており、話すと声が壁に当たって返ってくる。まるで楽器の中を歩いているみたいだ。迷路のような道をいっぱい通り、あるレストランを見つけた。それは特殊なイタリアンレストランで、電子メニューがあり、注文する前にパスワードの設定を求められていた。サブリナは思わずに心の中であの何度も繰り返していた数字譜、つまりジャンナの誕生日を入力した。相手はその細部を目にし、こうして氣に掛けられることに感動し、まがた 瞼の内側が湿っていた。レストランには料理とワインの香りが漂い、お腹が鳴ってきた。

「お腹空いたな、朝はクッキーしか食べてないの」とジャンナは甘えている口調でわざとらしく文句を言い、短

第三章 爛漫の語らい

い沈黙を破った。

「何時に起きたの？」

「八時過ぎに起きて準備したの。こんなお洒落なところにくるなら、ちゃんと着飾らないと」

「クッキーだけで、どう耐えてきたの？」

「いつも学校に行く時も朝食抜きだからね」

「授業中、力が出ないと思わない？」

「朝食を食べるより、私は寝た方がいい。学校の宿題が多すぎて、寝る時間がないの」

料理が運ばれてきて、話は中断された。ジャンナがその蒸気じょうきを立てるカルボナーラを手にとると、誘惑的な乳製品の香りがする。フォークで糸のようなパスタを数本絡ませて、待ちき

第三章 爛漫の語らい

れずに口に運んだ。食べ物がどんどん胃に入り、唇はわずかに薄紅に染まり、卵をたっぷり入れたクリームの濃厚さと麵の滑らかさを楽しんでいた。暖かい光に照らされて、顔は言葉に喩えづらい高級感がありながらも純真で、特に美しく見えた。見れば見るほどに人を魅了する顔だ。

食事を終え席を立つ時に、突然コートのベルトが解けていることに気づいた。サブリナは氣遣ってしゃがみ込み、軽やかな指先で彼女の腰に巻いて、新たに蝶結びを作った。その瞬間、少女はジャンナを見上げていて、それが二人の関係の行方を暗示していたのかもしれない。

レストランを出ると、雨はすでに止んでいたが、空はまだ曇っていた。先ほどの雨は数多くの花卉を路面に落とし、桜の川が

第三章 爛漫の語らい

いたるところに広がっている。店のショーウィンドウには精良な商品が陳列され、通りには絶え間なく人々が行き交^かっていた。

しばらく歩くと、巨大なデパートが目の前に現れ、その頂上の看板が特に目だって輝いていた。二人は直接エレベーターで最上階に登り、そこには金魚と山桜^{やまざくら}が光と絡み合うアートが展示され、生命が変わりゆく姿を五感で感じられる創造美術館があった。展示室の入り口の黒いカーテンを抜けると、まるで現代の喧騒を忘れる桃源郷^{とうげんきやう}に足を踏み入れたようだった。薄暗い灯^{あか}りに包まれた静寂の空間^{くうかん}。時折、淡い花の香りがする。二人は立ち並ぶ列柱のある水槽の前で止まり、水中から拡散されたライトによって顔は青みがかっていた。水槽の中では、七色^{なないろ}の

第三章 爛漫の語らい

光が^な緋^まい交ぜ、蕾^{つぼみ}が付いた枝が角に静かに伸びている。その空間は無限に広がっているようだった。泡はゆつくりと渦^{うず}を巻いて軽い煙のように上り、風と共に消えていく。活発な金魚が水中をのびのびと自由に舞い泳ぐに連れ、波にそよぐ雄蕊^{おしべ}を軽やかに揺らして生命力を付け足した。静の花と、動の金魚という、対極にありながらも、その極致^{きょくち}がむしろ調和を生み、相乗^{そうじよう}される至上の美が、春の宴^{うたげ}を作り出し、まるで彼女たち自身の喩えであるようだ。

サブリナはある質問が頭の中に湧いてきた。

「私はどんな人だと思っ？」

ジャンナは少し考えてから答えた。

「初めて会った日から、とても明るくて、誰とでもうまくやっ

第三章 爛漫の語らい

ていけるような方だと思った。だから、友達いっぱいいるんじゃないかな」

「え、いや、そうじゃないよ、うん」

と言葉が詰まった。確かに見た目だと、人懐ひとなつっこく、素直で言いたいことを率直に言う人ではある。だからそう思うのであれば、否定する必要はないと考えた。

「記憶の中で、初めて会った時、レイラと楽しそうに話していたのを見て、その頃から私は仲良くしたいと思っていた。それから、モニカと喋ったり、エイヴリーと遊んでいたりしている様子を見て、私から話しかける機会が全くないなあって。でもそんなサブリナはみんなの中で輝いているよ」

話を聞いて、いきなり心臓が激しく打ち始めた。それはごく

普通の言葉だったのに。そして、二人は展示室を歩き来しながら、話題が深まっていった。この幻想的な世界で、魚たちは魂を持ったかのように泳ぎ、過去の一つ一つの出来事が水槽の中で次々と浮かび上がった。飛び散る桜が服につき、髪に引っ掛かって、二つの心がより近くなった。いつの間にか、手を繋いで離れなかった。空一面に舞う花が友情の証人となった。

「彼女は静謐せいひつな優しさがあるの。□から出している言葉だけではなく、心の底から溢れ出しているの！あの日の満開の桜

(7) 静謐 静かで安らかなこと

第三章 爛漫の語らい

のように、ゆうえん優婉⁽⁸⁾で温かい」

少女の感嘆には深い懐かしさが込められていた。

「桜……」

とエイヴリーは敏感にその言葉に気がつき、軽口で言った。

「桜は美しいけど、咲く期間は短く、しかも最も輝いている時に散るんだよ」

ただの冗談が、嘘から出た実^{まじこ}になった。サブリーナは何も言わず、コップの底のコーヒーを一気に飲み干した。周りを見回すと、店内のインテリアは素朴で落ち着いていた。窓の外空はまるで湖、白い雲は白鳥のようで、水面に止まっている。彼女の動きによって、透明な青が徐々に濃く沈み、太陽は背中に白

(8) 優婉 優しくて淑やか。

い光の筋を映した。立ち上がって熱いお茶を一杯注ぐ横顔から漏れる表情は捉えがたい。しばらくするとまた話を続けた。

遊び疲れた二人は水をテーマにしたカフェを見つけた。周囲はさまざまな青。飲み物も青色のグラデーションで、ボトルの底から儚い光がさして、まるで夢の世界にしかない物。手を繋いで隣に並んだ席に座った。数口飲んだ後、ジャンナは自分の悲しみを吐いた。サブリナは、初めてその気持ちを知った。やはりつらかったんだ。そして、内面に隠れている重さを共感した。ジャンナは深い鬱然^{うつぜん}(9)を抑えて、大人しく優しさでこの世

(9) 鬱然 気分がずっと晴れないこと。

第三章 爛漫の語らい

に応えることを選んだのだ。太陽のように遠くて、眩しくて、輝き続けている人ではないが、常に小さな星光せいこうのようなものに身にある人だ。まるでマツチみたい^{みずか}に、自らを燃やして周りを温めている。

「私、変わっちゃったよ……静かになったの……前は明るかったのに」

とジャンナはこうまとめた。

一日の時間は白駒^{はつく}が隙^{げき}を過ぐほど、瞬く間に過ぎ去った。別れのホームに立ち、バラが咲く頃にまた一緒に花を見に行こうと約束を交^かわした。電車は駅から離れ、サブリーナとその日の素晴らしい思い出を乗せて木琴の音盤のように凸凹^{みづけ}している路面を馳した。彼女は初めて、雨の日の湿っぽい水^{みず}気が柔らかな美

第三章 爛漫の語らい

しさであると感じた。

しかし、その優しさを噛みしめる間もなく、デラニーから連発してメッセージが届いた。文字の行間には、もっと早く出会いたかったという意味が込められており、何度も熱烈に誘ってきた。それを断ることができず、仕方なく休み明けの金曜の放課後に遊ぶと承諾した。